



カトリック六甲教会 教会報



ユスト高山右近列福式

「教皇代理 Angelo Amato 枢機卿の説教」



1. 日本のカトリック共同体は、キリストの気高い子、その証し人であるユスト高山右近の列福の祭典を祝っています。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」というヨハネ福音書 12 章に記されたイエスの言葉が、右近の中で実現しています。加えて、「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう」というヨハネ福音書 15 章のことばも、また同様に実現しています。罪のない良き牧者であり、投獄され、死の判決を受けたイエスのように、その弟子たちも、歴史の中でたびたび迫害され、殺されたのです。ローマ皇帝による最初の迫害から始まり、最近の迫害に至るまで、憎しみと残酷さは、愛と善と兄弟姉妹の絆で結ばれた善意の世界をつねにおとしめています。いつくしみが悪に勝ることは、神の思召しであり、殉教者は、愛に満ちたキリストの国が信じるに足ることを証ししています。殉教者たちは、迫害する人びとに愛をもって向き合い、そのために祈ることさえしたのです。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言うマタイ福音書 5 章 44 節の言葉どおりです。単に赦しだけではなく、愛と祈りが、敵対する人びとに対する殉教者たちの逆説的な答えになりました。残忍さに対する殉教者の答えは、愛にあふれる親切さです。それは弱々しさではなく、想像を超える強さの現れです。このような方法で、殉教者たちは、罪の汚れのない血によって清め、また豊かな命の種を蒔くことによって、人間性を善いものに高めます。日本の教会は、数知れない殉教者の素晴らしい証しによって祝福されています。それは例えば、聖パウロ三木と同志たち、聖トマス西と同志たち、福者ペトロ岐部とその同志たちです。日本の殉教者たちには、老若男女、武士と一般の人びとなど、あらゆる階層の人びとがいます。福者ユストは、教会における栄光に満ちた最初の殉教者たちがそうであったように、キリストの卓越した証し人です。

2. ここで次の三つについて問うてみましょう。ユスト高山右近とは、だれであったか。そのキリスト者としての神髄はどのように息づいていたか。右近のことばは、現代の私たちにどのような意味があるのか。ユスト高山右近は、きわめて高い地位の人であり、日本の貴族階級に属していました。合戦で大きな手柄を立てた右近を、秀吉は大大名に取り立てました。右近は、キリストの教えを広めることを望み、日本人の宣教師やカテキスタを育てるため、安土、高槻、大阪にセミナリオを建てました。領内のキリスト者は、きわめて多くなり、1583 年には、3 万人の領民のうち 2 万 5 千人に達し、人口の大半を占めるほどだったと云われます。ユストは、大阪の教会も創設しま

した。また領地が明石に変わったとき、福音宣教活動を広げました。1585年から1587年までに、千人以上が洗礼を受けたのです。残念ながら、1614年2月、一つの法令が發布されました。それはユストと金沢のキリスト信者に対し、信仰を捨てるよう命じるものでした。これを拒んだ右近は、貧しさと孤独に耐える苦しみの時期を迎えることになりました。まず長崎に送られ、フィリピンへの追放を命じられました。1614年11月8日、300人の日本人信者らとともに長崎の港で乗船し、43日間の長く辛い航海の後、マニラに到着しました。追放と流配によって得た病のために衰弱しきった右近を、1615年2月3日、主は、みもとにお召しになりました。マニラに着いてから44日後のことです。フィリピンでは、右近の死を悼む悲しみは、大きなものでした。人びとは、日本の気高いキリスト者の徳と聖性によって感化を受けました。つぎの詩編のことは、ユストに帰すことができます。‘Justus ut palma florebit’（神に従う人はなつめやしのようになり 詩編 92.13）、‘In memoria aeterna erit justus’（主に従う人は…とこしえに記憶される 詩編 112.6）。

3. 第2の問い、キリスト者としての証しが、どのように息づいていたかを考えてみましょう。源泉資料は、ユストがイエス・キリストの使信、その愛のことは、あがないのわざに魅了されていたことを示しています。右近は、その確信により、日本の福音宣教に対する不屈の推進者になりました。

誉れ高く誠実な人として成長したユストは、真のキリストの武人でありました。そのわざにだけた剣ではなく、言葉とわざによる武人です。主イエスへの信頼は、このように、その心に、しっかりと根を下ろしたのです。迫害されても、流されても、捨てられても強くなりました。ユストは、その特権的な地位を失い、生活の貧しさが増し、打ち捨てられ、隠れた境遇になっても、気落ちするどころか、平静を保ち、洗礼のときの約束に、つねに忠実でした。またユストは迫害を受けた多くのキリスト者と同じように、悲劇的な死を予感しました。フィリピンへの航海の間、そしてマニラに着いた後、ユストは理解したのです。主が自分に望んでおられるのは、血を流す殉教ではない。ゆっくりと訪れる死、すなわち流刑による幾多の苦しみによって引き延ばされた死です。これは、いわゆる「追放の苦しみによる殉教(martyrium ex aerumnis exilii)」なのです。殉教は、命を差し出すことではありません。十字架に釘付けにされた主の苦しみに与ることでもあります。キリスト信者への迫害は、決して正当化できるものではないことをユストはよく理解していました。それは、イエスがヨハネ福音書 15章 22節で「人々は理由もなく、私を憎んだ」と仰せられているとおりです。

しかし、ロヨラの聖イグナチオの「霊操」によって育てられたユストは、神のはからいのために、自分自身の望みから離れ去り、それを完全に捨てる生き方をしました。ユストは福音を日本文化とは無関係の外的なことがらのように理解していたわけでは決してありません。イエズス会の宣教師の理解に同意していました。すなわち護教的な論争を避けたのです。ユストは、悪と死からの解放のために命を差し出したイエスの言葉を告げることだけに集中したのです。生涯最後の数か月、霊操の流れに身を任せました。それは、祈り、秘跡、瞑想、そして宣教師との霊的会話によって支えられていました。それらのお蔭でユストは義に満ちた平静さをもって死を受け入れたのです。自分を迫害する人々のために祈り、彼らを赦し、日本の回心を念じていのちを捧げて死にました。最初の殉教者ステファノのように、ユストは、イエスの名を呼び、自分の霊を主に委ねました。享年 63。過ごした年月の大半は不和と迫害が続く困難な時代にあって、キリストへの信仰を卓越した方法で証したのです。

4. 私たちの福者が、教会とすべての信者に何を残したのでしょうか。それは、偉大な信仰の宝です。ユストの信仰は、その存在の核心をなすほど成熟していました。ユストは信仰によって活かされていました。その生涯は、日本人としての生であり、茶の湯を含む日本文化を形成する伝統を大切にしました。茶の湯は、ユストによって人びとの交わりと兄弟姉妹の関わり場になりました。ユストの行動は、まさしく福音的でした。家来たちとともに憐れみを示し、貧しい人びとを助け、困り果てた侍たちには援助を惜しみませんでした。ミゼリコルディアの組をつくり、病人を見舞い、寛大に施しをしました。父ダリオとともに、家族のない死者の柩を担ぎ、墓に葬りました。それらすべては、人びとを驚かせ、それに倣いたいとの望みを呼び起こしたのです。迫害に直面したユストは、「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう」というヨハネ福音書15章20節に記されたイエスの言葉によって照らされました。イエスのご自分を信じる人びとが担う悲劇の運命の中に不在なのでありません。主は、まさに、その中にこそ、存在していただくことを、ユストは確信していました。ユストは、罪のないキリスト者の嘆きの中に、イエスの受難と死、その復活がもつ新しい意味を見ていたのです。殉教者は、何も失わず、かえって天上のエルサレムに着き、終わらない至福の中で神と出会うことができると知っていました。私たちの福者は、自らもまた信仰を証して殉教した使徒パウロの言葉に満たされて生きた人です。

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことはできないのです」(ローマ 8,35.38-39)。殉教者は、実りのない英雄などではありません。友愛と慈愛を告げる確かな使者です。ユスト高山右近の列福は、神がその摂理によって日本と世界の教会の中に蒔く種なのです。大聖レオは、次のように記しています。「教会は、迫害によって弱くなるどころか、強められます。教会は、つねに豊かな実りに富む主の畑です。なぜなら、一粒ずつ地に落ちた小麦は、生まれ変わって豊かなものになるからです」。私たちの福者の模範が、イエス・キリストの福音への信仰と信頼へと、私たちすべてを突き動かしますように。福者ユスト高山右近、私たちのために祈ってください。

(カトリック中央協議会 HP より)



1万人の信徒が参列した「ユスト高山右近の列福式」は厳かに行われました。参列者に多くの感動と喜びを残しながら……。



アンジェロ・アマート
枢機卿



右はユスト高山右近列
聖運動シンボルマーク

2016 年度 小教区拡大評議会議事録

- ★ 日 時 : 2017 年 2 月 11 日 (土) 10:00～11:25
★ 場 所 : イグナチオホール
★ 出席者 : アルフレド主任司祭、高山神父、議長団、評議員、地区役員、その他関係者

計 36 名

1. 主任司祭挨拶
2. 協議事項
(1) 2017 年度教会行事予定について
3. 報告事項
(1) 2017 年 1 月度神戸地区宣教司牧評議会報告
(2) 2017 年度新役員の紹介
(3) その他各部、各会からの報告
4. その他

次回 小教区評議会 : 3 月 12 日 (日) 12:00～ 第 4 会議室



2016 年度第 6 回地区役員会 (2017 年 2 月 5 日) 議事録

- 1 教会行事の振り返り
 - ① 主の降誕夜半ミサ (12 月 24 日) 後のお茶
 - ② 神の母聖マリアミサ (12 月 31 日 23 時) 後のカウントダウン
 - ③ 教会新年会、新成人お祝い会 (1 月 8 日)
- 2 教会行事日程と行事担当確認
- 3 2017 年度地区会役員 資料にて報告
- 4 2017 年度地区会予算 資料にて報告
- 5 2017 年度地区役員会開催日
※ 次回地区役員会 (2017 年度第 1 回役員会) 4 月 9 日 (日) 12:00～

お 知 ら せ

★ 2017 年度教会行事日程表、地区連絡網の配布について

“維持献金の郵貯銀行教会口座への振り込み票” も合わせて配布

・ 配布日程 :

3 月 18 日 (土) 19 日 (日) 25 日 (土) 26 日 (日) の各ミサの前後に
配布されますので、必ずお受け取りください。

クリスマス音楽の集い(2016年12月23日)

12月23日、恒例の「クリスマス音楽の集い」が開かれました。みぞれ交じりの天候の中、教会内外から、160名あまりが聴きにきてくださいました。

毎年「クリスマス音楽の集い」は、テーマに沿ってカトリック教会にふさわしいコンサートを行っています。今年は、第1部をイザヤの預言、そして受胎告知からマニフィカト、御子の誕生の場面を、聖書朗読を挟んだ歌やオルガンの演奏で綴りました。第2部では、フルート、ヴァイオリン、そして聖歌隊のキャロルなどバラエティー豊かな華やかな構成で、最後の「来たれ友よ」の全員合唱でクリスマスを迎える喜びを歌いました。

出演者は聖歌隊を始めオルガン、独唱の奉仕者など、ほとんどがカトリック信者で構成されています。教会ならではの、祈りの込めた音楽を、お客様に伝えられたことでしょう。

信者でない方からも好評で、よい宣教の場になったことと思います。

今回で6回目となるこの集いですが、毎年続けることより、リピーターも増え、教会行事として定着してきたことを感じました。
(音楽チーム・清水)

「クリスマス音楽の集い」に参加して

7年前に待望のパイプオルガンが設置されたのを機に始められた祈りを込めた音楽の集いが、着実に育まれた様相を目の当たりにした感動を受けました。

パイプオルガンの音色も良くなっているし、オルガン奏者の人数も増え、技量も長足の進歩を遂げている。

当初は外部の方々がコーラスをリードされていたが、今回は六甲教会のメンバーが主体に成って居る為か祈りが込められて居る様に感じられた。選曲の流れも良かったし、選曲された曲のバラエティーも良かった、一言で言うと構成が当初とは雲泥の差を感じた。メディテーションの域に少し近づいていると嬉しく思いました。

今後は、ミサ曲のグローリア、サンクトゥスの合唱名曲も交えて聖歌隊メンバーが研鑽を積み器楽曲と肩を並べて演奏されん事を期待します。
(ラウレンチオ 馬場)



ユスト高山右近 列福式(2017年2月7日 大阪城ホール)

列福式の記録のYouTube www.youtube.com/watch?v=d96PSEkMqHo

神のしもべ ユスト高山右近列福式ミサに参列して

待ちに待ったユスト高山右近列福の日、大阪城ホールは静かな興奮とよろこびの期待のうちにあった。六甲教会の信徒たちの席は祭壇のほぼ反対側のスタンド席Eブロックであり、余りに遠いのではと心配したが、大きなモニタースクリーンで司式者や参列者の表情まではっきりと映し出され、式の進行をしっかりと見守ることができた。壇上には主司式のアマート枢機卿教皇代理、日本、フィリピン(タグレ枢機卿)、韓国(6名)、ベトナム、カンボジア、ルクセンブルグからの司教方30名が並び、アリーナ席の前列と祭壇の後方のスタンドに併せて300余名の司祭・助祭が並ぶ盛大な列福式ミサが12時にはじまった。

司教方の入祭、回心、グレゴリアンでのキリエの合唱の後、「列福の儀」が行われた。まず岡田大司教からの列福の請願と右近の略歴紹介があり、列福を認める「教皇書簡」が教皇代理によって読み上げられた。そして「主こそわが光一祈る右近一」の大合唱の中、肖像画の除幕、聖遺物(ユ

スト着用（の服）が安置、そして献香による表敬がなされた。列福請願者から謝辞が述べられ、その後、栄光の賛歌と、ミサは続けられた。

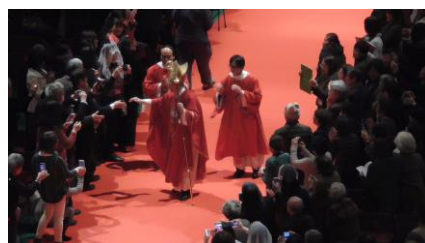
福音はヨハネ 12, 23-28「一粒の麦は地に落ちて…」、続いての教皇代理は説教で「高山右近は、不和と迫害の困難の中で、卓越したことばとわざをもって福音の宣教をすすめた。禁教令後は、地位・栄誉・財産よりも信仰を選び、その信仰を証していくことで『追放の苦しみによる殉教』に至った。ユスト高山右近は、今日の私たちの模範であり、イエス・キリストの福音への信仰と信頼への力のもととなる。福者ユスト高山右近、私たちのために祈ってください。」と述べられた。共同祈願は日本語の他、英語、韓国語、ベトナム語でそれぞれ右近にならい、信仰のため平和のために働くことができるようにと祈りを奉げた。その後タガログ語で奉納の歌があり、ラテン語での第二奉献文（聖変化と栄唱まで）とミサは続けられた。聖体拝領は日本語・ベトナム語・ハングルでの歌の中に行われ、私たちのいたスタンド席にも大勢の司祭が手分けをして出向いてこられ、授けられた。

拝領後、列福の決定から式の準備にかかわった各位と、参加された方々への謝辞が、司教団を代表して高見大司教、会場のある大阪の前田万葉大司教、列福までの歩みを進めたイエズス会の管区長梶山神父の3方からあり、150分余の列福ミサは感動のうちに終了した。

六甲教会からは聖歌隊に15名が参加し、準備の合同練習のその成果を十分に発揮した。座席の位置の関係で式の信仰の様子がほとんど見えず、YouTubeで式の進行を把握するしかなかったとか…。一方、スタンド席Eブロック参列の70名余りは、ばらばらに着席することになったが、おかげで、たとえば私は京都小山教会の信者さんとさいたま市浦和教会からの参加者に挟まれ、交流を深めることもできた。このように全国から海外からの参加者とともに、こんにちにおけるユスト高山右近の意味を確認し、新たな福者のとりなしを祈ることができた。新たなナショナリズムの台頭、ますます栄える消費文明、市場経済が支配し自然破壊が進み、格差がさらに拡大の一途をたどる中で、貧しい人達のため本当の平和を築いていこうという決心を新たにできた。ユスト高山右近、私たちのために祈り下さい。（飯塚）



会場の信徒を笑顔で祝福され
退堂されるアンジェロ・アマート
枢機卿



聖歌隊員として参加して

ユスト高山右近列福ミサの聖歌隊としての準備は、昨年夏の終わりから始まりました。一般の参加者より先に募集が始まり、定員になれば締め切るということでしたので、急いで申し込みました。当日は寒さが予想される2月の朝9時から練習という日程にも関わらず、15名の聖歌隊員が参加することになりました。

どんな、聖歌が使われるのか、ウキウキしながら待っていました。いろいろな方の意見を取り入れながらのミサ式次第の決定だったようで、最終的に全部の楽譜が送られてきたのは11月になってからでした。右近にゆかりのいろいろな国の言葉で、ということで日本語、ラテン語、タガログ語、ベトナム語、ハングルと送られてきて、さあ大変！YouTubeを見たりカタカナを読む練習をしたり、歌いやすいように、楽譜を書き直したりしました。ラテン語部分は列福式直前の日曜日に夙川教会で練習と、ミサがあったので皆で参加しました。だんだん歌えるようになると、とても楽しくて、大きな声で練習して当日を迎えました。

寒い日でしたが、電車組・車組に分かれて朝7時過ぎから家を出て無事到着。聖歌隊席では、それぞれ、いろいろな教会のお仲間とも出会い、本当に感動しながら一緒に歌うことができました。（三浦）

列福式に参加して

2月7日、大阪城ホールで行われた高山右近の列福式ミサに、昨年12月の3日と24日にそれぞれ受洗した家族2人（夫と末息子）と一緒に与った。参加を申し込んだのは昨年秋、まだ夫の頭の中に年内の受洗はなかったと思う。受付で訊いてみると、未信者でも構わないということだったので、何かのきっかけになるのでは？とお勧め頂いたこともあり、申し込むことにした。平日だったので、年休を取るようにと夫に念を押しておいた。未信者として参加するはずだった夫は、不思議なことに年末、フランシスコ・ザビエルの祝日に聖母病院の小さなチャペルで授洗して頂いた。そして、こちらは半年前にクリスマスの受洗を決めていた末息子と共に、信徒として列福式ミサに与ることになった。

初めて入る大阪城ホール、Eブロックは丁度祭壇のやや右寄りの正面席で、真下は中高生のオーケストラ席だった。教会からの貸し切りバスではなく、阪急と環状線で行ったので、知人には殆ど出会わなかった代わりに、それぞれの思いに浸りながら開始を待つことが出来た。1万人を収容する会場を次第に埋め尽して行く人達、祭壇の前方後方の席を次第に埋めて行かれる沢山の神父方に眼を瞠りながら、この列福式に懸けられた思いと祈りに次第に圧倒されて行った。会場に据えられた鐘が鳴り、Misericordes sicut Paterの入祭の歌に迎えられて大勢の司教方、そしてアマート枢機卿が殉教者高山右近を想起させる赤い祭服で入堂して来られると、大阪城ホールは大聖堂になった。若い司祭、助祭方が心を籠めて奉仕なさるミサ、あちこちの教会やカトリック校の生徒さんから編成された聖歌隊がリードするミサは、高山右近に似つかわしい力強さに満ちていたと思う。大スクリーンを通してうかがい知れるにこやかなアマート枢機卿のお歳を後から知って驚いた。

1万人もの参加者の心が一つになる瞬間を幾度も味わった。大きなミサで初めて揃って聖体拝領をした夫と息子も同じだと思う。家族で連帯感を味わうお恵みを頂いた。

高山右近の列聖運動の記憶は40年以上前の大学時代に遡る。署名運動も盛んで、今にも列聖が叶いそうな勢いだった。今年漸く成就したことの意味を考えると、やはり人の力だけではない大きな意思を感じる。最後に謝辞を述べられた梶山神父様が仰ったように、私達もこの世俗の中でこの貧しい人が更に貧しくなる社会の中で、右近に倣って富や名誉に惑わされず、右近のように国を追われて行き場所を失った人、虐げられた人を大切に生きて行かなくてはと素直に思った。信仰者の指針を示して頂いた列福式に与れたことに、未だに感謝と感動の思いを味わっている。

(久野)

ユスト高山右近列福式に与って

列福式ミサが進行し、アンジェロ・アマート枢機卿が「ユスト高山右近を私の使徒的権威によって福者の列に加えます。」と教皇書簡をラテン語で奉読され、福者高山右近の肖像画の除幕が行われました。ホール内はひととき荘厳な雰囲気に入れられ、喜びはクライマックスとなりました。

ミサに与ることができた恵みに感謝する中、私は、福者高山右近の生涯と、聖イグナチオ・ロヨラの生涯を重ねて思いめぐらしました。

身分ある戦国武将たちの世界に生まれ、上を目指す才能に恵まれていた右近と、貴族ロヨラ家に生を受け、騎士としての名誉を求めているイグナチオが目に見える富や、権力や、名誉が一時的なものにすぎないことを見抜き、心の中の戦いに勝って、神のしもべとして生きぬく信仰を選び取ったことや、秀吉の追放令、家康の追放令を受けたにもかかわらず人生の大きな節目には「イグナチオの霊操」を通してこの信仰を深めたことに心を寄せました。

また新たな心で「ユスト高山右近いま、降りていく人へ」を再読して福音を学びたいと思います。

高山神父様にはご多忙の中、お見送りと教会への到着をお待ちくださってのお出迎えをありがとうございました。参加された皆様とは終始なごやかにご一緒させていただき、バスの中ではゆっくりお話もでき楽しいひと時でした。

大阪城ホールでの列福式ミサに与るための準備を整えてくださった皆様に心から感謝いたします。

(市川)

ユスト高山右近列福式で感じたこと

「高山右近」の列福式は寒さも和らぎ大阪城公園の梅も見ごろのお天気に恵まれた一日となりました。会場入り口で手渡されたミサの式次第の表紙に描かれたユスト高山右近の肖像は、端正で物静かに真っ直ぐにキリストを見つめておられる姿に神々しさを感じました。制作者は右近の内面に秘めた凛とした信仰を表現されたのでしょうか。



中学時代の社会の担当先生はかつて神父様志願だったとか。先生の授業は信長時代のキリスト教伝来から秀吉の禁止令、家康の鎖国へと戦国の世の変遷を右近はじめとするキリシタン大名や迫害の内容になると熱の入ったものでした。特に右近は近くの明石城主でもあり、私にとって親近感を持つ歴史上の偉人となり、すでに列聖されていると長い間思い込んでいました。

列福式でアンジェロアマート枢機卿、大司教方々が語られたユスト右近が残した軌跡。キリスト教への厳しい弾圧の中にいながら忠実に怯むことなく宣教に布教に邁進し強い信仰を貫きとおし、400年前の戦国の世で彼自信、キリスト者として常にどうあるべきか祈りの中で模索し、勇気と慈愛の心で周囲の人達に接した行動は現代に生きる私達に残された大きなメッセージです。今、六甲教会で「右近と歩む祈りの旅」に添って行われている黙想も、右近の残した言葉を軸に神父方は日常生活に代えてテーマを与えて下さっています。

フランシスコ教皇様は「怠惰なキリスト者は前進せずに立ち止まり、あたかも教会を一種の駐車場にしてしまうのではなく、勇敢にどの時代にも歩み続けなければいけない。」と述べられた言葉があります。正に右近の軌道です。列福式に参列でき、ここで改めて考え見つめ直す機会に恵まれたことに感謝致します。

(クララ 貴島)

◆ 式典の参加者

- ★ 総参加者数：1万人（招待者：約200人）
- ★ 枢機卿：アンジェロ・アマート枢機卿
(教皇代理、列聖省長官)
ルイス・アントニオ・タグレ枢機卿
(マニラ大司教)
- ★ 司 教：約30人
- ★ 司 祭：約300人
- ★ 聖歌隊：約1000人



右近列福記念俳句に大林さんが佳作入選

高山右近列福を記念して大阪司教区が募集した俳句・川柳の入選作表彰式が、2月4日(土)大阪カテドラルで行われました。

俳句部門で六甲教会から大林さんの「右近訪ふ 巡礼の地や 秋高し」が佳作として選ばれました。当日は2時半からカテドラルの地下会議室で、まず右近合唱団のコーラスを聴き、そのあと俳句、川柳、短歌、似顔絵の各賞披露がありました。表彰式では一人ずつ「ゆるキャラ・うーこん殿」から賞状や賞品を手渡され、さらに「うーこん殿」との記念写真に収まり、和やかな集いとなりました。入選作は委員長賞、選者賞など多彩ですが、細目は当日口頭で報告されたのみで、書面も配布されませんでした。いずれカトリック時報に掲載されると思います。ここでは大林さんの受賞についてのみご報告しておきます。

《 各 部 だ よ り 》 各専門部会の活動をお知らせいたします。

📖 教会学校

3月11日（土）終業式・卒業式
3月11日（土）～12日（日）卒業合宿
3月12日（日）プチトマト公演
3月18日（土）～19日（日）練成会
3月25日（土）2年生練成会

📖 宣教部

3月26日（日）12:00 宣教会

📖 三日月会

3月20日（月）14:00 ミサと懇親会

📖 中高生会

3月26日（日）～29日（水）練成会

《 お 知 ら せ 》 教会のみなさまに知って頂きたい活動のお知らせです。

◆ 社会活動部より ◆

3月 1日（水）10時ミサ後 **手芸の集い**（第1、第2会議室）

どなたでも参加ご自由です。

3月11日（土）10時 **炊き出し**（イグナチオホール 台所）

小野浜グラウンドにて、おじさん達のお話し相手や配食だけでもOKです。

3月13日（月）9時半 **ともしび会**（イグナチオホール台所）

施設の子どもたちへのケーキ作り

3月19日（日）10時ミサ後 **ふれあい広場**（イグナチオホール）



み ん な の 広 場

塵

「あなたはちりであり、ちりに帰って行くのです」

今年の3月はこの言葉で始まる。祝別された灰を額に受け、日頃想いうかべることもないであらうこの言葉を聞く。

「いつくしみ深い神よ、あなたは、へりくだって罪の償いを行う人を受け入れ、ゆるしを与えられます。わたしたちの祈りに耳を傾け、この灰を受けるあなたの民に祝福を注いでください。四旬節の務めに励み、清い心で復活祭を迎え、御子の過越の神秘を祝うことができますように」（毎日のミサ、祝別式の祈り）。

今年の3月1日は「灰の水曜日」、四旬節に入る。復活の歓びに与るために。

（ヨハネ 三好）

哀 悼

今年になってお二人の敬愛するシスターが、相次いで神の御許に召されました。この悲しみはシスターに出逢った方々全てに共通するものと思いますが、お二人の目立たぬ所での愛の働きを少しお話しさせていただきます。

お一人は去る 1 月 16 日、戸塚の修道院でご帰天されたシスター及川喜久子様です。海星女子学院から横浜に移られてからは中々お会いすることが出来ませんでした。娘の恩師であり、私が今、教会に連なっているのもシスターがおられたお蔭です。

私事ですが、大学在学中の東京で受洗したのが我が家の信徒第 1 号の娘で、中学 3 年までの 3 年間のみ海星女子学院に在籍し、その後、父親の赴任先へ家族ぐるみ参りました。その間、運悪く老親が入退院の繰り返しで、私はやむなく帰神致し、娘は父親の赴任先の開発途上国に父親と残りました。

現在はインターネットで瞬時に世界中を交信出来る世の中になりましたが、当時はあちらより国際電話を掛ける時に車で 1 時間かけて首都のジャカルタの電話局に出向き、回線の順番待ちをせねばならない不便な所でした。そんな時シスターは母親不在で同年輩の友人も近くにいなかった娘の為にせっせとお便りを書いて励まして下さいました。その娘にシスターの訃報を伝えると、これまで親も知らなかった海星時代のシスターが行ってくださった「コタツの会」なるものが後での洗礼につながる話を聞き、シスターが生徒たちに種を蒔いて下さったことを知りました。私の代母もしていただきましたが、受洗後にイスラム色の強いパキスタンに行き来するようになり、現地の貧しい子供達の為に細やかな助けをして下さいました。ある時は「この頃の子供たちは教室の落とし物を取りに来ない」とおっしゃられ、鉛筆や消しゴムを集めておいて下さったりして運んだり致しました。

もうお一人は、お体の調子の良い頃は、教会でもお見掛けしていた援助修道会のシスター小南好子様です。1 月 20 日ご帰天なさり、もうあの物静かな温顔にお会いすることも出来なくなりました。

シスターの若い頃のご活躍は知りませんが、晩年は俳句の会も楽しまれたようですが、私は混声合唱団で一緒に歌った時期もありました。ある時、私のささやかなカラチのハンディを持つ子供たちの為にふれあい広場でのブースに関心を寄せて下さり、「昔、フランスに船で行く折、カラチに寄港したので、どんな所か分かります。」とおっしゃって、「小さな編物が良ければお手伝いしてもいい。」と大変有り難いお申し出をいただきました。

それ以降、私のブースに私の下手なミシン仕事と共に、編物達人のシスターが編んで下さった帽子やマフラー、時には可愛い動物達が並んでいました。お買い求め下さった方達は、心を込めて作られた作品を今も温かく使って下さっていることを信じます。

今年頂いたお便りに、「もう編み物でお手伝いする事ができなくなったので、これからはお祈りしています」とあり、最後まで、ご自分のできることで誰かの為にと、手を動かして下さいましたその思いに胸が熱くなると同時に、願わくは私もかくありたいと思います。

教育の現場で、群れを離れて遠くに行った子羊の如く、ほんの僅かしか居なかった元生徒たちにも心を留め、良き種を蒔いて下さったシスター及川様とお体の限界まで誰かの為にと、心を込めて手を動かして下さいましたシスター小南様の人に対する優しさ、愛の働きは、きっとお二方共に神のお傍近くに召されたことと信じます。

(エリザベト 金子)



◆ 四旬節のお知らせ ◆

3月 1日(水)	灰の水曜日 四旬節に入ります。7時、10時、19時のミサ中、灰の式
3月 3日(金)	初金ミサ
3月 5日(日)	四旬節第1主日 10時ミサ中、洗礼志願式 10時ミサ後、ユスト高山右近の列聖にむけて8日間の黙想 ⑦ 祈りととりなすつとめ
3月10日(金)10時	十字架の道行き
3月12日(日)	四旬節第2主日 10時ミサ後、ユスト高山右近の列聖にむけて8日間の黙想 ⑧ キリストの証し人
3月17日(金)10時	十字架の道行き
3月19日(日)	四旬節第3主日
3月24日(金)10時	十字架の道行き
3月26日(日)	四旬節第4主日
3月31日(金)10時	十字架の道行き
4月 2日(日)	四旬節第5主日
4月 7日(金)10時	十字架の道行き、初金ミサ
4月 9日(日)	受難の主日 10時のミサで枝の行列を行います。
4月12日(水)	聖香油ミサ(11時カテドラル)
4月13日(木)19時	聖木曜日 主の晩餐のミサ(洗足式)
4月14日(金)19時	聖金曜日 主の受難の祭儀
4月15日(土)19時	復活徹夜祭
4月16日(日)7時、10時	復活の主日

教会報 4月号の発行は4月2日(日)です。
原稿は3月19日(日)までに教会受付へご提出ください。
FAX 及びメールでも受付いたします。(広報部)
<http://www.rokko-catholic.jp>

カ	ト	リ	ッ	ク	六	甲	教	会	
〒657-0061	神戸市灘区赤松町 3-1-21								
電	話	0	7	8	-	8	5	1-2846	
F	A	X	0	7	8	-	8	5	1-9023
発行責任者	アルフレド・セゴビア								
編	集	広				報	部		